慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済史研究に就いて（六、完）
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.12 (1921. 12) ,p.1657(103)- 1667(113)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19211200-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

雜錄

經濟史研究に就いて（六、完）

野村兼太郎

一

社會に二種の必然性が存する。甲と云ふ原因があれば、必ず乙と云ふ結果を生ずる。「生ある者は必ず死ぬ」と云ふことは實際繰返されて起る必然性である。其處に單なる因果關係が存するに止まらないで、一の因果法則を構成するに至る。斯くの如き必然性は社會全般の經濟生活と云ふやうなものを考察するに當つて一層其の重要の度を高める、此の必然性の外に、更に他の一つの必然性がある。それはある目的を豫想し、それに到達するには必然經過しなければならない過程を示すものである。これは因果律的必然性と違つて其の前提を將來に有するものである。それが社會生活に於いてはシュタムラーの云ふ「最後の目的、すべて他のものが必然的に歸依されなければならない最高思索」であり、「社會的合法性の原則を批判的に知覺せんと求むる者」は必ず根據としなければならないものである。然し吾人が社會に於ける經濟生活を研究するに當つて、是等兩種の必然性の何れが重大な影響を與へるか。又さう云ふやうに總體的に社會の全過程を考察することが可能であるか。唯物史觀が社會生活の考察に當つて極めて有力であると云ふ事實は明かに社會生活と云ふものが多くの點に於いて因果律的必然性に羈束さるゝことを示すものである。個人生活に於いて吾人がそれぞれ個々の目的意思を有し、個々の行動が必ずしも所謂因果法則に依つて說明さ

れないことが相應存して居るが、社會生活に於ける人類の理性的行動は極めて無力であることが多い。殊に社會の經濟生活を明確にしやうとする經濟史に於いて全般の自然科學的因果律に基く考察が最も有力であることを免れない。尙ほ是等の點に就いて詳論すべきであるが、遺憾乍ら多くの餘裕を持たない。是等の點と關聯して常に吾人が想到するラムプレヒトに對するアシュレーの批評を見よう。

「Aが存して居なかつたこと、Bが存して居なかつたこと、而して若しもAとBとが存して居たなら、BはAを說明するのに適當でなかつたことが、普通の歷史家――日附と證據とを探求し普通の人性のあるものを知つてる歷史家にとつて明かである時に、餘りに屢々AがBに依つて說明される。ラムプレヒト敎授の著書の一例に依つて余の態度を說明しよう。(2)彼は獨逸に於ける十五世紀の官僚政治が當時の新しい貨幣經濟の成果であつたことを斷定する。余は此の命題を肯定或ひは否定する前に、（一）十五世紀に『官僚政治』があつたこと、（二）貨幣經濟(Geldwirtschaft)があつたことを、更に此の豫備の仕事が終つた時、（三）官僚政治は實際貨幣經濟に依つて支持されたこと、及び（四）官僚政治のあつたすべての他の國に於いて貨幣經濟のあつたこと及び貨幣經濟のあつた各國に於いて官僚政治であつたことを調べて見なければならない。是等がすべて示された時、此の實例が歷史の物質的見地を確實にするか如何かを思考するに十分完全な時であらう。

「然し乍ら余はラムプレヒト敎授の著述が惹起した論爭に少しも關係せずに彼に就いて述ぶることを欲しない。吾人が屬する專門的職業(the academic profession)の爲めに小冊子や雜誌の頁を開いた時のやうに、吾人を赤面させる如き惡口を模倣しないで暫くそれに就いて述べ得ることを望む。余自身の印象は次ぎの如くである。ラムプレヒト博士は其の目的としたことを試みるに於いて大體正しいものである。歷史の經濟的方面は多くの歷史家が考へて居たよりも廣く更に重大であつた。遍くそれは政治的發展を條件づけて居た。更に又獨逸人の云ふやうに、經濟的要因は一國民の發展の運動に最も重要である。すべて是は吾人の一般の歷史の前面に置かれ、且つ確實に保持されるやうに要求する。是をなすところの著者は其の時代に適ふものである。而して幾分かの誇張は早き試みとして許さるべきである。(3)然し余は彼の不注意なる究理のあるものが研究の現在の程度に於いて主張し得るよりも、若しくは彼の目的の全部の必要よりも、更に多く經濟的力を要求し、是が彼の根據を不當に偏頗ならしめたと思ふ。又余にとつて見るとラムプレヒト博士は餘りに少ない經濟的概念を以つてなしたやうに思はれる。若しくは各歷史的神秘を開くのに自然經濟と貨幣經濟との對立を以つてする、即ち一の經濟的公式に依ることは殆ど目的に適つて居ない。彼に對して餘りに經濟學者であることを抗論せずに、經濟學者以上であつたことを望んでもよかつたらう。而して結局歷史の特殊の『概念』若しくは特殊の『方法』の爲めの强度の議論は學者の普通の批判の吟味に立つべき仕事である。ラムプレヒト博士が受けた批判の多くが詰らない咎め立てのものであつたけれども、彼の後の著作の大部分が能く識らずに又急ぎ過ぎてると云ふことは甚だ明かである。然し余は經濟史の根據を唯物哲學の主張、若しくはラムプレヒト博士の讃美者の要求に束縛さるゝものとして考へない。」(3)

（Ashley:—"Surveys" p. 27-29）

ラムプレヒト博士の社會心理的の歷史研究法の議論に就いては尙ほ多くの論述を必要とするだらう。又それと共にそれぞれの特殊史を除いた後に所謂純粹の歷史の成立は可能であらうか。更に普遍史の問題に關聯して當然多少とも歷史哲學に觸れなければならない筈である。然しそれ等の問題は純粹史學の問題であつて此の場合餘りに問題外に逸するし、且つ是等を論ずる餘裕を缺いて居るから、すべて他日を期し、こゝには更にアシユレー敎授の論ずるところを見よう。

（註一）Patten:—"Development of English Thought." (Economic Journal, 一八九九年九月號）のアシユレーの評論參照。「原註」

（註二）然しラムプレヒト敎授のは決して最初の試みではなかつた。Nitzsch の著作は此の事に關して不思議にも忘れられて居た。(Surveys. p. 242)「原註」

（註三）恐らく獨逸で未だ議論の起らなかつた三、四年前即ち一八九四年十二月 Political Science Quarterly に載せたラムプレヒトの最初の三卷のアシユレーの評論を見よ。議論の「文獻」を知らんと欲する讀者は次ぎのものを見よ。議論の起つた Lamprecht の Deutsche Geschicht. Band. v. Lenz. (Historische Zeitschrift. lxxvii. 385. seq.) von Below (同誌 lxxxi. 193 seq.) Rachfahl (Preussische Jahrbücher, lxxxiii, 48 seq. lxxxiv. 542 seq. 及び Jahrbücher für Nationalökonomie, lxviii. 659 seq.) Bart:—"Die sogenannte materialistische Geschichtsphilosophie"（同誌 lxvi. 1 seq.）及び Lamprecht:—Zwei Streitschriften (1897) 及び Die historische Methode des Herrn von Below (1899)「原註」

三

アシユレー敎授は最初の論文で次ぎのやうなことを述べて居る。

「若しも經濟史が結局歷史の一分派に過ぎないならば、何故純粹の單純な歷史家に殘されないのか。若しくは若しさうすることに滿足しないなら何故自身經濟學者の中に這入つて來ないのかと尋ねるだらう。然り、經濟史に興味を有する者が『經濟學者』を見捨てゝ、"Ecce convertimur ad gentes!" と叫ぶ時が來るかも知れない。現在のやうなら經濟史は歷史と經濟學との兩分野に等しく屬することを許されるだらう。然し決して互に避けることの出來ない兩分野の接觸する此の同じ特徵は法制史や敎會史に就いても等しく眞理である。物の本質に依つて考へれば、所謂『純粹の歷史家』が宗敎の歷史と法律の歷史とを研究してはならないと云ふ理由はない。然し實際に於いて是等兩者の研究の仕事は通常狹義の神學者法律家を以つて始めた人々に依つて行はれた。そこで同じやうに最近に經濟史の知識を進めるのに最も多くのことをなした人々は、英國に特別の注意を拂つた著者のみを云へば、シャンツ(Schanz)オヘンコウスキー(Ochenkowski)（ルド（Held）ブレンタノ（Brentano）トインビー(Toynbee)カンニインガム(Cunningham)のやうな人々である。すべて是等は『經濟的』訓練をなし、而して現在の問題の興味から過去の研究に引込まれた人々である。メガンー敎授は此の上もない猛烈な言葉で不平を云つた。即ち『歷史學派は最初から吾人自身の科學の問題の根本的研究の結果を有さない。それは歷史派法理學のやうに、彼等自身の問題に眞面目に關係する經濟學者の科學的必要から起つたものではない。』[1]『外國の征服者のやうに歷史家が吾人に其の言論や慣例、其の術語や方法を强制して吾人の科學の領分に侵入して來た。』[2] メンガー敎授は斯く書き乍ら、世界に隱れた狀態を考へて居たのかも知れない。然し確かに彼の叙述は英國の著作が關係して居る範圍では甚だ正確を欠いて居る。想像するにリチヤード・ジョーンズ、クリッフ・レスリー、ソロルド・

ロッシャース等に經濟學者の名を否定する者はないだらう。トインビーの場合は仕事に從事した動機を十分に叙述して居る。其の短い生涯の終りの方でトインビーは專ら最近二世紀の經濟史に次第々々に注意を拂ふやうになつた。確かに『吾人自身の科學の問題』に更に深く突き入らんとする彼の頑とした欲望の爲めである。

「然しある著者達の幾分か嫌惡せる態度を述べるのはそれ等の精神の幾らかを有するからである。余の講義に於いて――余自身にとつて云ふならば、――余は明かに知識ある人々に要求する位の『純粹の歴史』の重なる事實と『純粹の經濟學』の重なる觀念を知ることを豫想する。余の德講者がノルマンの英國征服、コンスタンチノープルの陷落、アメリカ發見、佛蘭西革命等の屬する世紀を知れることを豫期され、同時に分勞とか需要供給とかの一般の意味を知れることを豫期し得ることを望む。若しも研究が歴史の方面からも經濟學の方面からも人々を牽きつけるならば喜ぶべきものであるだらう。然し研究者が彼等自身を捧げて、又人々が其の範圍を調査した後、新しい研究に努力するやうに刺激される限り、吾人はどの研究の集團が此の特殊のものに定められるかと云ふことを甚だしく心配する必要はない。こゝでは斯くの如き混雜が吾人を苦しめる必要の殆どないことは、ハーヴァード教授法の融通のきく制度の一利益である。」（"Surveys." pp. 17-18）

歴史家の研究せる經濟史が經濟學の知識を缺く爲めに、又經濟學者の研究せる經濟史が歴史的正確を無視する爲めに、共に多くの缺陷を有することは事實である。經濟史の完成が兩者相俟つべきものなることは論ずるまでもない。又經濟學其のものもそれが歴史科學の一として特に歴史的研究は必須不可缺のものであると考へる。尚ほ其の理由に就いては次ぎにアシュレーが經濟史研究の理由を紹介したる後に略説しようと思ふ。

（註一）Menger:-Irrthümer, Vorwort, p. iii.「原註」

（註二）Ibid. p. vi.「原註」

三

「さて今や吾人は本論を終らんとする前に、結局何故吾人は經濟史を研究しなければならないかと問はふ。第一に吾人はある者が最も低しと考へ、又他の者は自由教育の本質と見做す理由から經濟史を研究する。即ち自然な無邪氣な好奇心を滿足させんが爲めである。歴史は吾人が是迄それを所有して居たやうに、社會の表面の外的運動以外に稀しいあるものを語ると云ふことを發見すればする程、本當に信ずるに足る又明瞭なる知識の探求に牽き入れられるだらう。單に知らんとする欲求も多くの者の爲めには唯一の動機であり、十分なる理由となるだらう。ある有名な學者が彼は『それが現在起りつゝあることを更に明かに彼に知らせることが出來るのでないならば、過去に於いて起つたことを少しも知らうと欲しない』(1)と實際に云つて居る。オーギュスト・コムトは更に此の原則を進めて、彼の判斷に依つてある研究が人類に奉仕することの不可能な點に嘗つて到達してしまつたならば、それは非社會的のものとして、其の研究をば繼續して追求することを禁ずるやうにさへ申出た。偶然にもコムトが排斥して居た其の研究は彼の呪詛にも拘らず、昔から新しい又實際の應用に效果の多かつた單なる眞理に對する愛と云ふことから追求されたやうに追求された。而して恐らく經濟史に就いてもさうであらう。吾人は吾人のそれに就いて出來るだけ知らう。而

して其の適用はそれ自身の管理に任されるだらう。假令目的が研究者自身の興味以外に效用がないとしても、其の同情の念を擴大させ、其の可能の概念を大ならしめ、そして彼を市場の凡俗主義（Philistinism）から救ふだらう。

「然し經濟史が現代の議論と密接に結びついて居ることが吾人の多くにとつて當然附加される動機であらう。是は特に英米の特質、先例を愛する結果である。『アングロ・サクソン』精神と呼ばれるものに於いては、かくかくの狀態が過去に存在して居たと云ふ事實それ自體が現在に於いて存在するやうにしなければならないと云ふ强い理由となる。引證された歷史的事實が屢々如何なる理論的論證よりも人心を支持することは、人望のある社會的、若しくは革命的運動に接觸したところの誰にでも非常に注意されるものである。例へば原始的共產主義（a primitive communism）に於ける信仰を見よ。ヘンリー・ジョージ氏が其の讀者に告げて、――而して彼は疑ひもなくある最近の權威の述作の中にある表面的の辯證を有する。――『土地共有の權利は元來何處でも認められて居た。而して私有權（private ownership）は横領の結果としてより以外には何處にも生じて居なかつた。』と云ひ、又『歷史的にも、倫理的にも土地の私有財產は强奪である。』[3]と云つて居る。此の議論がジョージ氏自身に關係すると云ふよりも、大部分ジョージ氏の敎義の思想に始まると云ふことを發見するのに適するやうに諸君は單稅論にのみ注意した。或ひは更に英國社會主義者の文獻に於いて十五世紀に於ける英國勞働者の黃金時代の繪を如何に卓越したものとなしたかを注意せよ。――其の說は最初ソロルド・ロージャースから借用したものであつた。そして今や殆ど受け容れられた眞理と見做されて居る。吾人は八時間勞働の運動が勞働者の長く失はれて居た幸福の恢復に過ぎないものであると告げられるやうにさへなりつゝあるのである。余は吾人が斯くの如き運動の爲めの若しくはそれに反對した議論を發見せんが爲めにのみ歷史を繰返さないと信ずる。然し吾人の研究が現代の論議に對して此の好奇的態度を有する事情は正しく更に鋭いうま味をそれに與へるだらう。

「而して最後に物理的性質の研究に刺激されるのに似た希望――即ちそれに依つて人間社會の發達の更に滿足な知的な概念に到達しようと云ふ希望に依つて此の範圍の研究に這入る者もあらう。恰も生物的及び物理的科學に於いて研究者は、彼が如何に學ぶことが出來さへしたならば、秩序正しくそれ自身の場所を占め、それ自身の意義及び妥當を有すると云ふ信念に依つて支持されるやうに、人類の歷史に於いても吾人はそれに聯絡ある繼續せる全體を發見するまで、若しくは無意味な斷片の混沌に過ぎないことを確實に知るまでは決して滿足することは出來ない。吾人は――現代的意味に於いて古い句を用ひれば、――『神の道は人にも正しとす』と云ふことを止めることは出來ない。吾人が斯くの如く歸一せる歷史の概念から尙ほ如何に懸け離れて居るかは殆ど云ふ必要はあるまい。特に『社會學』てふ殼を以つて無益に飢を滿足させやうと試みて居る者に對して云ふ必要はない。吾人が饑餓の天罰に逢ふやうに强制させられる是等の絕えざる日常の必要に於いて、地球の含むよきものを土地から產出する爲めに絕えず行ふ勞働に於いて、更に產物の巧な分配に對する努力に於いて、吾人は繼續の絲、即ち歷史を最後に『淺薄なる村落物語』"a shallow village

tale" より以上の何ものかになすところの統一した一般化を發見することはないことだらうか。」("Surveys." pp. 18-21)

經濟史研究の必要に關して、アシュレーは上述の三點を擧げて居る。然し余は更に別の方面からして更に一つの理由を擧げたい。それは經濟學の研究方法として經濟史が缺くべからざるものであることである。すでに述べたやうに社會に於ける二個の必然性を考ふる時、歷史科學若しくは文化科學としての經濟學が其の採るべき研究方法が單なる自然科學的方面のみであつてはならないことは極めて明かなことであらう。然し乍らこゝに歷史的研究の必要を云ふも、それは從來の所謂歷史派經濟學の採用せるものとは少しく其の趣きを異にする。個々の歷史的研究に基き是より歸納して一の自然科學的因果法則を發見しようとするのは、人類の社會生活の一面たる經濟生活を其對象とすべき經濟學の研究方法として妥當なものであると云ひ得ない。今日の經濟學が大體に於いて貨幣を中心として考察され、經濟價値は貨幣を以つて稱量され、――換言すれば經濟上議論となるは主として價格論であるが如きは、明かに經濟學が今日の時代を背景とする歷史科學であることを示すものである。而して今日の時代を形成する過去の事實が又是と至大なる關係を有するのは當然であるが、それは單に歷史は繰返すが故に重大なのではない。歷史は其の特殊性に基いて記錄さるべく、文化科學はそれ等の個別性を基本とする目的論的必然性を明確にすべきものであると考へる。此の意味に於いて歷史研究の重要なる意義を認めんとする者である。經濟史の研究に當つても、其の經濟史に記載すべき事項の取捨に際し、其の根柢に一の經濟的價値を前提としなければならない。それが如何なる內容を有するかは經濟哲學の一つの問題である。

今日の經濟學の用ひる術語はすべて歷史的背景を有する。今日の實際に對して經濟的方面から價値判斷を下したものは今日の經濟學である。故にアダム・スミスの「國富論」やマルサスの「人口論」を正當に理解するには當時の英國の經濟狀態を知ることが必要である如く、やがて又今日の經濟原論も將來に於いて今日の歷史的研究を要求されるだらう。アダム・スミスの使用した profit と今日使用する利潤と相等しくないやうに、將來の經濟學に於いて云ふ利潤は恐らく異なるものではないだらうか。斯くの如き學說の變遷を探求するは經濟學史の問題である。經濟史はそれ等の對象として、又は根本として形成さるべき筈のものである。然し經濟史の分野は未だ十分に開拓されてない。唯今後の努力に俟つ許りである。

(註一) Mr. John Morley, u. s.「原註」

(註二) Progress and Poverty, Book vii. chap. iv.「原註」

附記。本論文に於いて論ずべきことを多く省略してしまつたのは一に未だ十分に考へ盡されなかつたからである。即ち此の一編は一の未定稿である。將來再び同一問題に就いて論ずる機會があると思ふ。未熟の文を公にしたことに就いて深く讀者にお詫びして置く。

社會思想家としての
ウヰリアム・モリス（六、完）

加田哲二

一五

社會主義者同盟の目的は、モリスの云つてゐるやうに、革命的國際的社會主義の宣傳にあつた。同盟の設立者はすべての議會主義的改良策